



## 口腔内衛生

口腔内衛生管理は、単に虫歯や歯周病を予防するのみならず、口腔の正常な機能を維持することにより、口腔の疾病予防、健康の保持増進、リハビリテーションによりQOLの向上に繋がる。口腔衛生において、口腔内細菌の把握が重要である。人体の器官の中で、常在菌が最も多いのは口腔であり、主に、歯面、舌、粘膜、口蓋や、唾液中に分布する。口腔内には多くの常在菌が存在するが、健康ならばその均衡は保たれる。しかし、加齢や疾患に伴う自浄作用の低下や免疫能の低下は、口腔内衛生を悪化させ全身状態に悪影響を及ぼす。歯垢（デンタルプラーク）中には、1 g中に約1000億の細菌、唾液1 mL中には約1億の細菌が存在する。口腔内や咽頭に常在する細菌を含む唾液を気管内に誤嚥すると、誤嚥性肺炎を引き起こす。癌手術直後の患者では、体力が低下し一時的に肺炎にかかりやすくなり、手術前に口腔衛生管理を実施することにより、唾液中の細菌量が減少し術後肺炎の発症予防、および在院日数の減少に寄与すると報告されている。また、口腔内の慢性炎症および歯周病細菌毒素の血中流入は、心筋梗塞や糖尿病などの生活習慣病との関連も報告されている。

近年、研究技術開発により網羅的細菌叢の解析が可能となっている。加齢や免疫能低下に伴う、口腔内細菌叢の変化の把握は重要である。網羅的細菌解析により、糖尿病や心筋梗塞と関係する細菌叢の把握、口腔衛生を測る指標となる細菌叢の探索を行う。